続・金谷健一のここが変だよ日本人の英語（第１回）

金谷健一
岡山大学

前回の講座が好評で，続編を書くことになった．今回のシリーズは口頭英語を取り上げる．その最初として，まず会話の基本，特に多くの日本人が誤解していることを指摘する．国際会議に出かけると，論文発表だけでなく，外国の先生と挨拶したり，空港や町で買い物をする．このとき，日本人のしゃべる英語は非常に奇異である．例を挙げよう．

1. ものを注文するとき

飛行機内で飲み物をサービスしている乗務員は Would you like tea or coffee? と聞く．私の経験では 100%の日本人が Tea あるいは Coffee と答える．これを聞くたびに私は身の毛がよだつ思いがする．ネイティブがそのように言っているのを聞いたことがない．

私が外国のファーストフード店で何かを買い，それを持ってカウンターを離れる．背後で次の客が店員から声を掛けられたらしく，One hamburger という声が聞こえる．私はあまりの意外さにドキッとして振り向くと案の定日本人である．こんなことを言うのは日本人しかいない．外国に行く度にこんな場面に何度も遭遇してやり切れない思いである．

もちろん初めの例では Tea, please または Coffee, please が正しい．後の例では One hamburger, please が正しい．ものを依頼したり注文するには please をつけるということは中学校の英語で習う（フランスでは s'il vous plait，ドイツでは bitte）．センター試験の会話問題にも必ず出る．だから 100%の日本人が知っている．そして全員，外国で please をつけずに人を驚かしている．相手は笑顔で応対するかもしれないが，周りの人が聞いて不自然である．なぜ please が出ないか，これを後で考察する．

2. ものを受け取ったとき

初めの例で乗務員がコーヒーをついだとする．100%の日本人がそれを飲む．後の例では 100%の日本人がハンバーガーを受け取ってカウンターを去る．日本人旅行者が外国で評判を落とすのも無理はない．ネイティブがどうしているかを見ればすぐわかる．しかし日本人は何も知らずに楽しそうで，私は絶望的になる．

もちろん，どちらの場合も Thank you と言わなければならない（フランスでは Merci，ドイツでは Danke）．日本人は Thank you を好意に感謝する言葉と勘違いしている．だから店員に感謝する必要などない（感謝されるのは客だ）と思い込んでいる．しかし，Thank you は感謝というより「取引の終了の合図」である．ものを受け取って Thank you というのは「これが私の望むものです．確かに頂きました」という確認である．言わないのは「さらに欲しいものがある」，または「これは私の望むものでない」という意味になる．だから店員は次に何を言われるか思わず緊張する．Thank you と言われて初めて次の人の応対に移れる．

論文発表でも最後に Thank you (for your attention) という．これは聴衆に感謝しているのではなく,「これで私の発表は終わりです」という合図である．聴衆はこれを聞いて初めて拍手ができ

る．Thank you がないと，次にまだ何か言うのかと身構えてしまう．

ものを受け取ったとき（=取引が終了したとき）Thank you と言うことも中学校で習う．実際，機内で乗務員とネイティブの次のような会話をよく聞く．

A: Would you like tea or coffee?
B: Tea, please.
A: Here you are.
B: Thank you.
A: You are welcome.

センター試験にもこのような例が出る．それでもほぼ 100%の日本人が please や thank you と言えないのはなぜか，それを後で考察する．

3. 買い物をするとき

スーパーで買い物をする．商品を持ってレジで並ぶ．前の人が済んで，自分の番である．100%の日本人が商品を置き，店員が金額を計算してくれるのを待つ．私は外国で何度もこのシーンに遭遇していやな思いをする．

現地の人は必ず Hello（フランスでは Bonjour，ドイツでは Guten Tag）と声を掛けている．日本人は知り合いでもないのにといぶかしく思うが，これは挨拶というより「さあ，私の番ですよ」という合図である．スーパーでなくても，店で商品を持ってカウンターに行くと，まず Hello と言う．これは「さあ，私が買い物をしますよ」という合図である．

ほとんどの日本人が何もいわずに商品を差し出し，店員が何か言うのを待っている．その結果，店員から先に何かを言われる．店員と目が合った瞬間に間髪を入れず Hello と言うのがよい．相撲の立会いのような一瞬の技である．

空港の出入国のカウンタでもそうである．係官より先に Hello と声を掛けるのがよい．Hello は「はい，私の番ですよ」という合図とともに「私は英語で話しますよ」という意思表示の意味もあるので，必ず英語で答えてくれる（試しに Bonjour と言うとフランス語が，Guten Tag というとドイツ語が返ってきた）．日本人は何も言わずにじっと待っているから，慣れた係官は英語の話せない日本人と推察して「コンニチハ」と日本語で話しかけることもある．そして，それを聞いた日本人は喜んでいる．

4. 言語の役割

これまでの例から，国内で礼儀正しい（会ったときにお辞儀をする）ことで知られている日本人が外国で相手国の目からいかに礼儀知らずに映るか想像できる．この理由は日本との習慣の違い（店では客は無言で通し，店員のみが形式的にしゃべり続けるなど）とともに，please = 好意を依頼，thank you = 感謝の気持ち，hello = 親愛の挨拶，などという英語の誤った理解である．

言語はコミュニケーションの道具であり，コミュニケーションの代表が「取り引き」である．取り引きの言葉は「意味」より，その「役割」が本質である．辞書の意味に引きずられてはならない．その取り引きを実行する合図は何か，これはその国の人が何と言っているかを聞き，それを真似ればよい．

私も若いときにアメリカで，世話をしてくれたアメリカ人の先生と買い物に同行したとき，どこの店でもまず店員に Hello と声をかけていたので，この先生はこんなに多くの店で店員と馴染みになっているのかと驚いたものである．今から思うと笑い話であるが，未だにその衝撃が記憶に残っている．

5. 挨拶の仕方

今度は純粋な挨拶である．国際会議に出かけ，ホテルに泊まり，朝，朝食にホテルのレストランへ行くと，知り合いのスミス教授がいた．さあ何と挨拶するか．

たいていの日本人は，朝だから当然 Good morning だと思う．確かに何も言わないよりはマシだ

が，これでは挨拶になっていない．

これは英語会話（フランス語でもドイツ語でも同じ）の最初のレッスンで必ず習う．この場合は（スミス教授が自分より相当年配だとして）Good morning, Professor Smith と言って初めて挨拶になる．年があまり離れていない場合はファーストネームで Good morning, John などという[注 1)]．すると向こうも Good morning, Kenichi などと言ってくる[注 2)]．

このように名前を含めて初めて挨拶になる，というより，むしろ名前を呼び合うことに意味がある（名前を知らない人には Sir, Madam などをつけるが，英語はフランス語，ドイツ語ほどではない）．名前をつけないで単に Good morning と言うと，先に述べたように店や税関や事務所で午前中に「もし」,「どなたかいますか」,「はい，私の番です」などの Hello と同じ合図になる．午後なら Good afternoon，夕方なら Good evening を用いる（それに対して Hello は時間帯に無関係）．

しかし，名前を含めて呼び合っても実はまだ挨拶は完了していない．必ず次に何か「一言」言わなければならない．それを言って初めて挨拶が完了する．それは中学校の教科書にも書いてある．センター試験にも出る．

最も標準的なのは教科書通りの How are you?（答えは Fine, thank you. And you?）であり，くだけた表現では How are you doing?ともいう．It is a beautiful day, isn't it?のような天候の話題でもよい．ホテルの朝の一言で使用頻度が高いのは Did you have a good sleep yesterday?だろう．私もこのように言われたことが数多くあった．最近では言われる前に私から言い出すように心掛けている．

重要なことは，Good morning, Xxxxxx に続けて何か一言をセットにしたものが「挨拶」なのであり，これを言い交わしたら後は好きなように談話に入ればよい．しかし，ほとんどの日本人は Good morning の部分だけが挨拶で，その後は談話だと誤解している．そのため，相手から一方的に何かを言われ，Yes, Yes と答え続け，喜んでいる．

6. 日本人から見た外国人

以上のように，外国での日本人の言語挙動がいかに非常識かを述べたが，逆も成り立ち，日本での（特に少し日本語をかじった）外国人の言語挙動は日本人からみて非常識なところが多い．例えば店でもどこでも「コンニチワ」,「ドウモアリガトウゴザイマス」を連発して奇異な印象を与える．

私がある英国人と食事に行ったとき，店員が料理を運んでくる度に習い覚えた「ドウモ」,「ドウモ」と言うので，私は彼に日本では何も言わなくてもよいとたしなめたことがある．彼は非常に驚いていた．

もちろん外国ではウェイターが何かを持ってくる度に Thank you というのが礼儀であると同時に,「はい，これは私が注文したものに間違いありません，確かに受け取りました」という確認の合図でもある．Thank you と言わないとウェイターが内心で何か問題があったかと心配になるであろう．

一方，日本語の「（どうも）ありがとう（ございます）」は感謝と恐縮の意味しかない．このため「すみません」や「申し訳ない」にも等置できる．確認するには黙ってうなずくしかない．

私の研究室にいるスペインの留学生は私に会うと,「オハヨウゴザイマス，カナタニセンセイ」,「ハイ，カナタニセンセイ」,「アリガトウゴザイマス，カナタニセンセイ」などと「カナタニセンセイ」を連発されて閉口する．日本では相手に向かってそのように名前を添えないのだと言いたいが，母国での習慣は抜けないであろう．だから，逆に日本人が外国で名前を添えるべきところに何もつけないのも外国人にとっては,（別に感情を悪化させないが）奇異な印象を与えるのである．

7. 日本人の非常識の本質

そうである.「奇異な言語挙動でも，問題を生じたり感情を悪化させるまでには至らない」ことが事態の改善を阻害する最大の要因である．外国に行って来た日本人は「こう言って通じなかった」,「こう言ってトラブルになった」,「こう言うべきであった」という失敗談，反省談をよく自慢げに話す．もちろん，一度失敗したことは二度と繰り返さない．人間は失敗から学ぶ動物である．

しかし，hello, please, thank you が言えなくて，自分に失敗した，まずかった，という意識がないから永久に学習できない．そもそも日本人の最大の関心は「英語の理解と伝達」である．相手が何を言っているのかわからない，こう言いたいが英語でどう言えばよいかわからない．だから英語を勉強する．そして

- 相手の言うことが完全にわかる．
- 自分の言いたいことは何でも英語で言える．

というレベルに到達する（このレベルに到達した日本人は非常に多い）．そして，次のようなコミュニケーションが成立する．

1. 相手が何か言うと，それを瞬時に対応する日本語として理解できる．
2. それに対して日本式の適切な応答ができる．
3. それ（のみ）を瞬時に英語で言える．

これが一瞬にできるのが「英語の達人」であり，すべての日本人はこの境地に到達しようとして英語を勉強する．だからこれまで指摘した基本会話は，いかに多くの教科書や教材で取り上げようと，センター試験に出ようと，決して自分の口からは出ない．そのような基本会話を聞くと完全に理解できることに喜びを感じるが，それはテレビドラマを見るような第三者意識であり，自分がそれを言う必要性を感じない．なぜなら，自分は “自分で言いたいこと” （そして，それのみ）を何でも英語で言えるからである．

結局，言語機能が英語化しても思考回路が日本式のままだから，いつまでも背広を着て下駄を履いているような違和感が残る．この問題はもはや言語学習の問題を超えているので，たぶん解決できないであろう．そのかわり，やがて世界中の人に「日本人はそういう言い方をするのだ」ということが知れ渡り，もはや誰も奇異に感じなくなる，そういう日が来るであろう． (続く)

注 1) 英米では学生も先生をファーストネームで呼ぶことが多いが，これを嫌う先生もいて，私の知人は不平を言っていた．このため学生が人によって使い分けることもある．ある学生は私に日本ではファーストネームで呼ばれるのかと尋ね，日本では使われないと答えると，以後私への呼びかけは（メールをよこすときも）Professor Kanatani となった．先生に対する本来の呼びかけは Sir であるが，今日では皮肉ととられる（Kingsley Amis の小説に先生を Sir で呼びかける奇妙な学生の話が出てくる）．

注 2) Kenichi ではケニチと読めるから，ケンイチと読ませるために Ken-ichi とハイフンを入れよと勧める誤解（神話？）があるようだ（誰が言い出したのか？）．これは全く無意味であり，ハイフンがあってもなくても英語としての発音は同じである．目的を達せないどころか外国人に無用の混乱を引き起こし，このハイフンは何か，ichi がセカンドネームか，などと問われ，返答に窮する.「ケンイチと読ませるためだ」と答えても，ケンイチと読めないから答になっていない．ケンイチと読ませるには Keng-ichi と g まで入れる．この g は無音であり，中国人の姓「王 (Wang)」をワンと読むのと同じである．こうすれば間違いなく日本人の読むケンイチと同じ発音をしてくれる（実際，日本人も無意識にこの無音の g を入れて発声しているのだ）．ただし，このスペルで我慢できればの話である．その他，Ota ではオタと読めるからオータと読ませるために Ohta と書く，Sato ではサトと読めるからサトウと読ませるために Satoh と書くなどの外国人を混乱させる無駄な努力が多い（むろん英語の発音はそのようなつづりの変化に影響されない）．日本人が英語の発音に弱いのもこのような無知が関係しているのであろう．